

J. R. R. トルキーン 『二つの塔』 における 〈光〉の描写の色彩表現

川原 有加
日本大学大学院総合社会情報研究科

The Different Color Descriptions of ‘Light’ in *The Two Towers*

KAWAHARA Yuka
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a study of the different color descriptions of ‘light’ in *The Two Towers*, which is the second volume of *The Lord of the Rings*. ‘Light’ and colors as a whole are used very effectively. ‘Light’ has something to do with the sun light, the moonlight or the phial gleaming in the story. Each light represents characters’ thoughts and feelings in various scenes with the use of colors. Moreover the light contrasts with the darkness. On the metaphysical level, light and darkness symbolize the conflict between the beneficent and the malevolence in *The Two Towers*.

序

J. R. R. トルキーン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973) は、ファンタジー作家として数多くの作品を発表している。今なお世界中で人気を得ている代表作『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-1955)は、『旅の仲間』(*The Fellowship of the Ring*, 1954)、『二つの塔』(*The Two Towers*, 1954)、『王の帰還』(*The Return of the King*, 1955)の三部より成り、トルキーンは様々な物語技法を巧みに駆使し、作品構成や作品展開に効果的に活かしている。

本論文では、『指輪物語』の第二部『二つの塔』における〈光〉の描写の色彩表現について、物語展開に即し、具体例を示しながら、その効果と役割を検証していく。まず、〈光〉の描写に関して最も中心的な太陽や月の光が描写されている場面を取り上げ、次に、〈光〉を表わす色彩の一つである‘red’に注目して使用例を検証し、さらに、暗闇の中での光に関して考察を進めていく。

1. 『二つの塔』のプロット

ホビット (hobitt) のビルボ(Bilbo)は、甥であり養子のフロド(Frodo)に魔法の指輪を譲る。その指輪は

世界を支配する力を備えた邪悪な指輪であり、昔、ビルボがゴラム (Gollum) =スメアゴル (Smeagol) から獲得したものであった。エルロンド (Elrond) の館で開かれた会議でフロドや魔法使ガンダルフ (Gandalf) をはじめとする9人の〈旅の仲間〉が結成され、滅びの山へ指輪を棄却する旅に出ることになる。途中、ガンダルフが怪獣バルログ (Balrog) との戦いで橋から転落する。さらに、〈旅の仲間〉の一人、人間のボロミア(Boromir)がフロドの持っている指輪を狙って襲いかかる。指輪は無事だったが、フロドは危険を感じ、一人で滅びの山を目指す決意をする。しかし、そのことにホビットのサム (Sam) が気づき、フロドと一緒に旅を続けることにする。

フロドとサムがいないのに気づいた他の旅の仲間たちは、人間のアラゴルン (Aragorn) とドワーフのギムリ (Gimli) とエルフのレゴラス (Legolas)、ホビットのメリー (Merry) とピピン (Pippin) の二手に分かれてフロドとサムを探すことにする。

アラゴルンたちは角笛の音を聞く。駆けつけるとボロミアが倒れている。ボロミアはオーク (Orc) に襲われていたメリーとピピンを助けるためにオークと戦ったが、やがて力尽きたのである。アラゴルン

たちはボロミアを弔い、亡骸を船に乗せて川に流す。アラゴルンたちはホビットたちを捜索しながら厳しい旅を続けていると、ローハン国のエオメル（Éomer）に出会う。エオメルの軍はオークに勝利していたのである。一行は森の中に入ると、老人の姿を見かけるが一瞬で消えてしまう。

一方、メリーとピピンはオークに連れ去られていたが、脱出することに成功し、森に迷い込む。そこで、二人は〈木の鬚〉と呼ばれる森の守護者エントのファンゴルン（Fangorn）に出会い、助けられる。二人はファンゴルンからエントたちの話を聞く。エントたちの森を破壊した魔法使サルマン（Sarman）と戦うために、メリーとピピンはファンゴルンと共にアイゼンガルドの塔に向かう。

アラゴルンたちがファンゴルンの森の奥へ進んでいくと、一瞬で消えた老人を再び目にする。それは橋から転落したガンダルフで、白い衣を着て現れたのであった。アラゴルンたちとガンダルフは、ローハン国の王セオデン（Théoden）に会うために宮殿に向かう。セオデンは最初、相談役グリマ（Gríma）の意見を聞いていたが、グリマのたくらみをガンダルフが見破り、セオデンはアイゼンガルドへの出陣を決める。アラゴルンは宮殿でセオデン王の姪であり、エオメルの妹エオウィン（Éowyn）と出会う。

アイゼンガルドに到着したアラゴルンたちは、門でメリーとピピンに再会する。合流した一行はオルサンクの塔に入り、サルマンに対面する。ガンダルフはサルマンの賢人団追放を宣言する。サルマンが逃げていくとき、グリマが一行に向かって珠を投げ落とす。その珠はガンダルフが保管することになるが、その珠に興味を示したピピンは、夜中、珠を持ち出す。ピピンは珠を見つめると、珠から目が離せなくなり、やがて気絶する。その珠は遠隔の地を見ることができるパランティアの石であった。ガンダルフはアラゴルンにその石の管理を依頼し、一行はミナス・ティリスへ向かう。

他方、〈旅の仲間〉から離れて旅を続けていたフロドとサムは何かの気配を感じる。捕らえてみるとゴラムであった。サムはゴラムを信用しないが、フロドは道案内することを条件にゴラムを助ける。やがて、イシリアンの林の中でボロミアの弟ファラミア

（Faramir）と出会う。彼はボロミアの亡骸を乗せた船を発見したことをフロドたちに話す。フロドたちはファラミアの隠れ家に案内され、休息をとる。ファラミアはゴラムを信用しないようにフロドに忠告するが、フロドはゴラムをそのまま道案内役とする。

フロドたちはミナス・モルグルの塔を通り、洞穴の中に導かれる。そこは、蜘蛛女シェロブ（Shelob）の棲処であった。気がつくやゴラムは消え、暗闇の中、サムはエルフの国ロスロリアンの女王ガラドリエル（Galadriel）から星の玻璃瓶をもらったことを思い出し、その光を頼りに進んでいく。やがてシェロブが現れ、フロドたちは戦う。しかし、フロドが力尽きる。サムは玻璃瓶の光をシェロブに向け、シェロブを倒す。サムはフロドが持っていた指輪を引き継ぎ、一人で旅を続けていく決心をする。サムが指輪をはめたとき、オークの話し声が聞こえ、フロドが生きていることが分かる。しかし、フロドは連れ去られ、サムも気を失ってしまう。

2. 『二つの塔』の特色

『二つの塔』の大きな特色はその物語構成にあると言える。『二つの塔』は、第一部『旅の仲間』に引き続いた物語で第三巻（Book III）と第四巻（Book IV）の二巻で構成されているが、それぞれの巻は独立した物語となっている。

『旅の仲間』の最後で〈旅の仲間〉が離散し、三グループに分かれる。前半にあたる第三巻は、フロドとサム以外の〈旅の仲間〉の二つのグループの物語である。アラゴルン、ギムリ、レゴラスがメリーとピピンの足取りを追っていくことで物語が展開していくが、物語の描写の順序はアラゴルン、ギムリ、レゴラスの物語が先に、メリーとピピンの物語が後となっており、実際のグループの進捗と逆転している。また、彼らが再会するまでそれぞれの物語が数章単位で交互に記され、劇的アイロニーが見事に設えられている。一方、後半にあたる第四巻は、フロドとサムに加え、『指輪物語』の前作『ホビットの冒険』（*The Hobbit*, 1937）において指輪に大きく関与していたゴラムが登場し、伏線的展開となっている。第三巻と第四巻は同時間の物語であり、それぞれの登場人物が作品中で交わる箇所はない。しかし、両

巻に共通して描かれている登場人物は人間のボロミアである。ボロミアは、『旅の仲間』の最後で指輪の誘惑に負け、指輪を持っていたフロドに襲いかかる。これにより、『旅の仲間』は離散し、『二つの塔』の物語へと続く。第三巻ではまず、アラゴルンたちの物語によってボロミアが力尽きる場面が描かれ、次にメリーとピピンたちの物語によってボロミアの最期に至る経緯が明らかとなる。第四巻では、ボロミアの亡骸を発見した様子と指輪を狙って襲いかかったボロミアの出来事が語られる。ボロミアが第三巻と第四巻の連結者となっているのである。

3. 〈光〉の描写の色彩表現

(1) 太陽と月の光

『二つの塔』では、朝日や夕日などの太陽や月の光の描写が多く、物語の展開に大きな影響を及ぼしている。それらは単にその場面の情景を描写しているだけでなく、時間の経過と併せて間接的に登場人物の心身的状態の詳細を表したり、物語展開の伏線的事項とつながっているからである。また、太陽や月や星の光の描写には色彩表現が欠かすことのできない要素となっていることは言うまでもない。

第三巻ではアラゴルン、ギムリ、レゴラスがホビットたちを探す旅から始まる。彼らは恐怖感と疲労感に襲われる。しばらくするとアラゴルンたちはオークの黒い血が流れているところを目にする。時は朝を迎えようとしている。

Already the eastward sky was turning pale; the stars were fading, and a grey light was slowly growing. (24)¹

東の空からは白々とした朝の光が射してくる。光の色は‘grey’であり、白みがかった光がゆっくりと辺りに広がり、明るくなっていく情景が描かれ、オークの血の黒さとは対照的である。明るい情景を裏付けるように、その後アラゴルンたちは探していたメリーとピピンの足跡を発見する。三人は一晩休

んだかのように元気が出る。この朝の光はアラゴルンたちに精気をもたらす光であるのと同時に、物語展開における重大な事柄を迎える予兆となっている。

さらに本格的に夜が明け、朝へと移り変わっていく。

The red rim of the sun rose over the shoulders of the dark land. Before them in the West the world lay still, formless and grey; but even as they looked, the shadows of night melted, the colours of the waking earth returned: green flowed over the wide meads of Rohan; the white mists shimmered in the watervales; and far off the left, thirty leagues or more, blue and purple stood the White Mountains, rising into peaks of jet, tipped with glimmering snows, flushed with the rose of morning. (24)

暗闇から色彩あふれる大地が現れ、暗から明への変化が様々な色彩を用いて描写されている。朝日の光の色‘red’、草原の色‘green’、燃えるように輝いている山脈の色‘blue’、‘purple’、‘white’から明るくなっていく朝の様子が読み取れる。また、水の流れる谷間の白い靄の美しくきらめく様は、トルキーンが池から上がっている靄に本当の光を見た²という逸話を連想させる。この場面は朝の幻想的な雰囲気醸し出している。

しかし、行く手の方角の光景の描写は曖昧な色である‘grey’が使用されているように、旅人たちの今後の旅の不安も覗かせているが、その不安は的中する。足跡をたどっていくことは困難であり、疲労感に苦しむのである。夜になるのが早く、月の光もおぼろげで弱い。アラゴルンは地面に横ばいになり眠り込む。

やがて夜は明け、きらきらとした光が射し始め、ほの白い光が辺りを照らす。しかし、アラゴルンの顔は不安げな表情である。それは、なかなかホビットの痕跡を発見できないことによる疲労と憤りの表れである。その後も旅を続けていくが、三日経って

¹J. R. R. Tolkien, *The Two Towers*, Second Edition. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982. 以下、同書からの引用は括弧内に引用ページ数を記す。

² Clyde S. Kilby, *Tolkien and The Silmarillion*. Illinois: Harold Shaw Publishers, 1976, pp.27-28.

も手掛かりがつかめず、また寒い夜を迎える。アラゴルンとギムリはうとうと眠ってはすぐ目を覚まし、レゴラスはそばで歌を歌っている。

... and as he sang the white stars opened in the hard black vault above. So the night passed. Together they watched the dawn grow slowly in the sky, now bare and cloudless, until at last the sunrise came. It was pale and clear. The wind was in the East and all the mists had rolled away; wide lands lay bleak about them in the bitter light. (32)

空は堅そうに黒く頭上に広がっているが、そこに白い星が輝き出す。エルフのレゴラスの歌によって空は‘black’から‘white’という暗から明への変化が起こる。夜が明け、暁の光が雲一つない空にゆっくりと満ちていく。さらに朝日は澄んだ光であり、霧も晴れて広い土地が見渡せる。この日、彼らは今後、重要な人物となるエオメルに出会うことになる。朝日の光はエオメルとの出会いという重大で善き出来事を予兆するように明るく美しいのである。

一方、オークに捕らわれていたメリーとピピンは、オークから逃げ出す。オークに分からないように夜に行動を起こすが、東の空が次第に白んできて、朝が近づいていることが分かる。そのとき、黒々とした森が彼らの目の前に姿を現わす。この森は入らないように言われていたファンゴルンの森であると察知する。しかし、二人は大きな木々の下に避難できる方を選択し、森に入っていく。木の下での暗がりから顔を出した二人は、次のような光景を目にする。

Far over the Great River, and the Brown Lands, leagues upon grey leagues away, the Dawn came, red as flame. Loud rang the hunting-horns to greet it. The Riders of Rohan sprang suddenly to life. Horn answered horn again....

The Sun's limb was lifted, an arc of fire, above the margin of the world. Then with a great cry the Riders charged from the East; the red light gleamed on mail and spear. (62-63)

焰のような太陽の光が射しこんできたことで、ローハンの騎士たちに活気が戻り、突撃を始める。その光は鎧や槍にも当たっている。この場面の‘red’は〈戦い〉を連想させ、突撃する騎士たちに力強さを注ぎこんでいる。しかし、オークたちは森の縁まで攻め込んでくる。その危機を救ったのがエオメルである。メリーとピピンはさらに森の奥深く逃げ込み、危機一髪のところ助かる。

森に入ったメリーとピピンはオークに対する恐怖感はおさまるが、森の薄暗さに気分は優れない。しかし、分かれ道に来た時、黄色っぽい太陽の光を感じる。彼らはその光に向かって進み出す。すると、辺りはだんだん明るくなり、岩壁が現れる。

No trees grew on it, and the sun was falling full on its stony face. The twigs of the trees at its foot were stretched out stiff and still, as if reaching out to the warmth. Where all had looked so shabby and grey before, the wood now gleamed with rich browns, and with the smooth black-greys of bark like polished leather. The boles of the trees glowed with a soft green like young grass: (65)

日の光が注ぎ込んだことによる森の色彩変化は、色彩表現の多用により詳細に描写され、さらに力強い。メリーとピピンはこの美しさに魅了され、岩を登っていく。そこで、二人はファンゴルンに出会い、疲労困憊した体を癒すことができる。

メリーとピピンはファンゴルンから水が入った大きな器を受け取る。

They seemed to be filled with water; but he held his hands over them, and immediately they began to glow, one with a golden and the other with a rich green light; and the blending of the two lights lit the bay, as if the sun of summer was shining through a roof of young leaves. Looking back, the hobbits saw that the trees in the court had also begun to glow, faintly at first, but steadily quickening, until every leaf was edged with light: some green, some gold, some red as copper; while the tree-trunks

looked like pillars moulded out of luminous stone.
(73-74)

ファンゴルンが手をかざすと、器から光が放ち始める。その光は、‘gold’ と ‘green’ である。二つの光は太陽の光ではないが、「若葉の屋根を通して射し込む夏の太陽の輝き」と例えられている。太陽の光のようなまぶしくて美しい金色と、生い茂っている葉のような緑色の混じり合った輝きは、力強さや精気をもたらし、疲れ切っていたメリーとピピンに活力を与える。また、前庭の木々も光を放ち始める。光は次第に明るさを増していき、緑色、金色、赤色に輝く。ファンゴルンは周りの景色に光を与えることによって、メリーとピピンを癒したのである。

他方、アラゴルン、ギムリ、レゴラスの一行には再び姿を現したガンダルフが加わるが、疲労感の中、寒く、暗い状態での旅が続いている。やがてゆっくりと東の方の暗闇がうすれてゆき、赤い光が照り始め、曇りない明るい夜明けが訪れたことが分かる。

Before them stood the mountains of the South: white-tipped and streaked with black. The grass-lands rolled against the hills that clustered at their feet, and flowed up into many valleys still dim and dark, untouched by the light of dawn, winding their way into the heart of the great mountains.... at the mouth of the vale there stood like a sentinel a lonely height. About its feet there flowed, as a thread of silver, the stream that issued from the dale: upon its brow they caught, still far away, a glint in the rising sun, a glimmer of gold. (110)

寒く冷たい夜であったが、赤い光が射し、夜明けを迎える。丘の山の端には明るい朝日の光だけでなく、金色に光るものがあり、一行はさらなる明るさに気づく。この金色の光は、これから向かうセオデン王がいるローハンの黄金の館の輝きを先取りしている。セオデン王は、のちに一行とともに出陣することになる人物であり、この光はセオデン王の高貴さを表しているだけでなく、物語への彼の関与を暗示しているのである。しかし、ここで迎える夜の様

子は、この先の旅の不吉さを予感させる。

... but as they rode out from the shadow of the hills and looked west to the Gap of Rohan the sky was still red, and a burning light was under the floating clouds. Dark against it there wheeled and flew many black-winged birds....

They rode now at an easy pace and dark came down upon the plains about them. The slow moon mounted, now waxing towards the full, and in its cold silver light the swelling grass-lands rose and fell like a wide grey sea. (155-156)

空は赤く、燃えるような光が注いでいるが、黒い翼の鳥たちが多く旋回している。空と光の色 ‘red’ は、鳥の色 ‘black’ によってかき消されているようである。さらに遅い月の光は冷たそうで、光の暖かさが感じられない。

夜が明け、一行は再びアイゼンガルドへ向かって旅を続ける支度を始める。しかし、周りの景色は決して晴れやかではない。

At dawn they made ready to go on. The light came grey and pale, and they did not see the rising of the sun. The air above was heavy with fog, and a reek lay on the land about them. (158-159)

朝日の光は ‘grey’ と ‘pale’ で描写され、ぼんやりした薄白い光であることが分かる。また日の出も見られない。さらに、霧が重くたちこんでいる。先行きが分からず、おそらく厳しいであろう一行の道中を暗示している。

以後の場面にも太陽や月の光の描写が見られるが、色彩表現をともなっている箇所はほとんどない。それは、様々な風景の描写が色彩表現を用いて詳細に描かれていた旅の場面からアイゼンガルドでの戦いの場面へと物語の中心が移行していくからであると考えられる。

第四巻に描かれているフロドとサムの旅もアラゴルンたちと同様、恐怖感と疲労感に絶え間なく襲われている。フロドとサムの旅の物語は、夕闇が増し

てきたころの場面から始まる。彼らの前には険しい断崖が立ちはだかる。サムは夜明けまで待ってから断崖を降りることを勧めるが、少しでも先を急ぐフロドは断崖を降りて行こうとする。フロドの焦りに合わせるかのように夕闇も深くなってくる。淡々しい星々が三日月の上の青天井に表れ、光は決して強くはない。しかし、断崖を降りるために使ったエルフからもらった灰色の綱は見るのできるのである。綱の色‘grey’は、あいまいで目立ちにくい色彩としてエルフの身近なものに用いられている。暗闇の中で見えにくい綱であるが、フロドは光っていると感じ、サムも綱の色は灰色ではなく、銀色に見える。暗闇の中で綱は光り、銀色に見えたことで、フロドたちは断崖を無事降りることができる。

険しい断崖を乗り越えたフロドたちは、冷たい夜の暗闇の中で疲れ果てて睡魔に襲われる。

The moon now rode high and clear. Its thin white light lit up the faces of the rocks and drenched the cold frowning walls of the cliff, turning all the wide looming darkness into a chill pale grey scored with black shadows. (219)

石や岩壁に囲まれた厳しい情景など非理想的経験の原型が見られるが、そこに照っている月は高く明るく、薄く白い光を照らし出している。その光は闇夜の黒い影を青白い灰色に変えている。月の光は、断崖を突破した達成感とつかの間の休息で得られたフロドたちの回復度合いを示唆している。しかし、その光は薄白く灰色であるため、フロドたちは完全な回復や安全な環境が得られたわけではない。

さらに、光の青白さを形容している‘pale’は、この場面以後にも関連する。この光に照らされて小さな黒い姿が現れ、青白い二つの小さな光がちらちらと見えてくるのである。月の光が照らし出している周りの暗い状況と小さな黒い姿と青白い二つの光から読者は何かよからぬことが起こることを予測できる。読み進めると青白い目が半眼に開かれていることが分かり、スースーという音とともに、ゴラムが姿を見せる。暗いところを好む様子を象徴するように夜が更けたところでゴラムは姿を表わし、暗闇

の中へ飛び込んでいく。フロドは、ゴラムを縛るために断崖を降りるときに使用した灰色の綱を使う。その綱はフロドたちにとっては命を救うものであったのに対し、ゴラムにとっては激しい苦痛をとまなうものなのである。これは、エルフの綱でゴラムを縛ることにより、善が悪に勝利していることを暗示している。

やがて夜明けが近づいてくる。

At last the sky above grew faint with the first grey of morning. Gollum had shown no signs of tiring, but now he looked up and halted.

‘Day is near,’ he whispered, as if Day was something that might overhear him and spring on him. ‘Sméagol will stay here: I will stay here, and the Yellow Face won’t see me.’ (228)

夜明けを迎えるが、フロドは疲労困憊のため休むことを提案する。彼は太陽の光に安心感が得られ、日射しを浴びながらの休息を望む。対照的に、ゴラムは太陽のことを‘Yellow Face (黄色い顔)’と比喩的な表現をする。太陽は、暗闇を好むゴラムにとって、すべてをはっきり見ることができる眼を有する存在なのである。

ゴラムは次のように言う。

‘You are not wise to be glad of the Yellow Face,’ said Gollum. ‘It shows you up. Nice sensible hobbits stay with Sméagol. Orcs and nasty things are about. They can see a long way. Stay and hide with me!’ (228)

太陽に対して、フロドやサムの場合とゴラムの場合では意味合いが異なる。‘yellow’はホビットが好んでいる色であり、明るく陽気な印象をもたらす。この場面でも、フロドたちは太陽の光を喜んでいる。一方、ゴラムは太陽が輝いて明るくなり、事物がはっきり見えるのを嫌っている。これはゴラムに後ろめたい思いがあることの暗示であり、‘yellow’は嫌悪、裏切りの意味をもたらした象徴的な役割をも果

たしている。「ヨハネによる福音書」3章20-21節³にあるように、黄色い顔である太陽はゴラムの悪の行為を目にし、また、彼は自らの悪の行為が明るみに出るのを嫌い、黄色い顔に見られないようにかくれようとしているのである。この場面は、光＝善、暗闇＝悪という図式が読みとれる⁴。最終的に、ゴラムはフロドたちを裏切り、フロドたちのこの先に続く旅の厳しさと数奇な運命を予期している。

安心できるような情景はなかなか訪れないまま、荒々しく風が吹き、雲を吹き飛ばしているある夜、夜の暗さが次第に薄れ、明るくなり、月が現れてくる。フロドとサムは月を見て心が和むが、ゴラムは動こうとしなくなり、おじけづく。ゴラムはこの月のことを‘White Face（白い顔）’と表現している。これは太陽を表わした‘Yellow Face’を受けてのものである。この月は白い光を照らし出し、フロドたちに明るさと安らぎを与えているが、ゴラムは光を照らし出す月は太陽と同じ光を放つものとして嫌悪している。これはゴラムと闇、すなわち悪との結び付きを強固にする。

フロドとサムは茶色くすがれた羊歯が重なり合っているところを見つけ、休息をとることにする。

Here they decided to rest and pass the day, which already promised to be bright and warm. ... Gollum, in any case, would not move under the Yellow Face. Soon it would look over the dark ridges of the Ephel Dúath, and he would faint and cower in the light and heat. (259)

羊歯の茶色くすがれた様子は、勢いがなく暗い印象を受けるが、そこは昨年の羊歯が生殖している場所であり、断崖や岩壁が多かったこれまでの道中の景色から比べるとふかふかに重なりあった植物の上

での休息の場は安心できるである。黄色い顔である太陽は昇り、辺りも明るくなるが、フロドは旅を進めるのではなく、休息をとり、英気を養えることを選択する。一方、ゴラムは太陽の光と熱で元気を失っていく。

しばらくしてサムは食事を作ることにする。その食事はフロドとサムにさらなる活力を与える。食事が終わった時、サムは太陽が昇ってくるのを見る。

At that moment he saw the sun rise out of the reek, or haze, or dark shadow, or whatever it was, that lay ever to the east, and it sent its golden beams down upon the trees and glades about him. Then he noticed a thin spiral of blue-grey smoke, plain to see as it caught the sunlight, rising from a thicket above him. (264)

東から太陽が昇り、二人のいる林や空地に光を注ぎ込む。フロドとサムは休息をし、食事を取り、さらに二人の周りの景色が暖かく明るくなってくる。フロドたちは心身ともに回復することができたのである。太陽の光には‘beam’が、光の色には‘gold’が使われている。この光は力がみなぎり、強い光であり、何か善きことが起こりそうな印象を受ける。青みがかった灰色の煙が立ち昇っているのに気づいたサムは、煙を消そうと茂みに近づく。煙の色は‘blue-grey’であり、‘blue’は好天の空の色を、‘grey’はフロドたちが険しい断崖を降りるために使ったエルフの綱を連想させる。サムは口笛の音色や話し声を聞く。その声はファラミアたちであり、彼らはフロドとサムに安らぎの場を提供し、さらに第三部の『王の帰還』において物語展開に影響を及ぼす登場人物である。金色に輝いた太陽の光は明るい印象であるが、立ち昇っている灰色の煙は一瞬暗い印象を与える。しかし、太陽の光を受けた煙からは決して暗い印象を受けない。それは、この煙はファラミアとの出会いを導く重要な役割を果たしているからである。

フロドとサムはファラミアたちの隠れ家から出発し、旅を続けていく。ファラミアはゴラムを信用しないように、また東へ向かわないようにと忠告する

³ 『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、1987年。「悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。」

⁴ 赤祖父哲二、川合康三、金文京、斉藤武生、ジョン・ボチャラリ、林史典、半沢幹編『日・中・英言語文化事典』、マクミランランゲージハウス、2000年、p.1353。

が、ゴラムの道案内で進んでいくと、最終的には東を向かって進んでいたのである。彼らは夜の闇の中、厳しい斜面を登っていく。フロドは休息のとき振り返ると、後にしてきた森の屋根が濃い影となって暗い夜のように横たわっているのを目にする。東からは巨大な黒々としたもの、つまり暗闇が不気味に姿を現わし、東の方角に対する不吉さを募らせる。この先、フロドとサムはゴラムの道案内によってキリス・ウンゴルの塔、さらにシェロブの洞穴へと導かれ、これまでのような太陽や月の光を浴びることのない暗闇の中での旅が続いていく。

以上のように第三巻での色彩表現を伴った太陽や月などの光の描写は、夜から朝を迎える場面が多い。これらの中には、陰しく厳しい道中の不安を表わす場合もあるが、大半は旅人を癒し、道中に希望をもたらす光である。暗から明への変化は周りの景色だけでなく、登場人物の不安感を除去したり、明るい気分に行っていると言える。一方、第四巻は同じように夜から朝を迎える場面が描かれているが、変化の仕方や情景はこの先の旅の不吉さを暗示している場合が多い。また、光を好むフロドやサムと光を嫌うゴラムとの違いが明確になっている。太陽の光を受けて明るさと安らぎを得て、旅を続ける希望と勇気を身につけていくフロドとサムは、暗闇の中にある敵の棲処へ導いていくゴラムと対照的である。これは、明と暗、ひいては善と悪の対立を示唆している。

（２）塔の不吉な光

第三巻ではこれまで述べてきたように太陽の光の色彩表現として‘red’が用いられている場合があるが、それは単に太陽の光の色彩だけを表わしているのではない。旅人たちはその光によって活力を与えられ、心身共に回復することができるのである。だが、‘red’はメリーとピピンが捕らえていたオークの盾の印である一個の赤い目（the Red Eye）にも見られ、先々の旅の不吉さを予兆させる使用もある。この場合、『二つの塔』において‘red’がオークとの関連性が深く、悪を象徴する色彩となっている。また、第三巻の冒頭より何度か‘red’の描写が見られることによって‘red’は物語展開上で重要な色彩であることがわかる。

第四巻ではフロドとサムの前に広がる不気味な塔の光の色彩が‘red’で表わされている。フロドとサムの旅が始まるが、夕闇の中、二人の前には厳しい情景が広がっている。二人は東南の方角の先を見つめる。

South and east they stared to where, at the edge of the oncoming night, a dark line hung, like distant mountains of motionless smoke. Every now and again a tiny red gleam far away flickered upwards on the rim of earth and sky. (290)

東から吹いてくる冷たい風やどんよりと冴えない緑色から陰気な茶色への地面の変化は、フロドたちの不安と呼応している。先に見えるのは、彼らが向かおうとしている場所である。そこには小さな赤い光が燃え上がっているのが見える。‘gleam’はかすかな光であり、光の遠さを表わしている。その描写から何か悪しきことが起こる印象を受ける。

ファラミアと別れて再び旅を始めたフロドたちは夜が明けるのを待っているが、明るくはならない。

But no day came, only a dead brown twilight. In the East there was a dull red glare under the lowering cloud: it was not the red of dawn. (308)

射している光は‘red’であるが、暁の光ではなく、どんよりした茶褐色の薄明かりの中での鋭いざらざらした光である。‘light’ではなく、‘glare’を使用することによってざらざらしている様子を明確にしている。朝を迎えた明るさはなく何か不気味な雰囲気漂う。しかし、この赤くざらざらした光はしばらくして消え、薄明かりから暗闇に変わる。

キリス・ウンゴルに入りますます暗闇が増してくる中、ミナス・モルグルの塔だけは光で照らされている。しかし、その光は月の光ではなく、おぼろげで、嫌な臭いを放つ腐敗物の光であり、死屍の燐光のようにゆらぎ、何をも照らさない光である。

暗闇も深まり、疲労困憊のフロドにはさらに指輪を所持する負担も加わってくる。休息を求めるフロドであるが、サムとゴラムはそこで滞在することに

反対する。フロドは仕方なく進むことにするが、その時、岩が揺れ動き、赤い閃光が当たる。その後、黒い装束に身を包んだ軍勢が現れる。ここでの赤い閃光は悪しきことが起こる前触れである。

黒い姿の軍勢との戦いが終わり、フロドとサムは階段を登っているうちに赤い光が次第に強くなっていることを感じる。

Dimly the hobbits could discern tall piers and jagged pinnacles of stone on either side, between which were great crevices and fissures blacker than the night, where forgotten winters had gnawed and carved the sunless stone. And now the red light in the sky seemed stronger; ... (319)

黒々とした割れ目の中に赤い光がさらに強く当たり、東の空を陰気な赤さにし、強く照り返している。

The horn upon the left was tall and slender; and in it burned a red light, or else the red light in the land beyond was shining through a hole. He saw now: it was a black tower poised above the outer pass. (319)

この光がやがて塔の中からのものであることが分かる。光の赤さと塔の黒さは明暗の対照的な色彩であり、不気味な情景が広がっている。

フロドとサムはゴラムの導きでさらに暗い場所である蜘蛛女シェロブの巣に入っていく。フロドとサムはまだシェロブのことを知らない。フロドはまず暗闇の中で目の前の蜘蛛の巣を切り払う。

It seemed light in that dark land to his eyes that had passed through the den of night. The great smokes had risen and grown thinner, and the last hours of a somber day were passing; the red glare of Mordor had died away in sullen gloom. Yet it seemed to Frodo that he looked upon a morning of sudden hope. (332)

フロドは目の前の障害を取り去ったことにより、

明るくなり、喜びと活力が湧いてくる。もくもくと立ち昇っていた煙は薄れ、以前のぎらぎらとした赤い光は消え、フロドは希望の朝を目の前にしているような錯覚に陥る。しかし、本当は暗闇の中の陰気なぎらぎらした光が今なお続いている。

サムは強い恐怖感に襲われる。彼は暗闇から目をそらし、前方を見る。

He saw that the sword which Frodo still held unsheathed was glittering with blue flame; and he saw that though the sky behind was now dark, still the window in the tower was glowing red. (334)

青い焰のようなフロドの剣のきらめきと暗闇の中で赤々と照り映えている塔の窓によってサムの恐怖感は一層強くなる。青くきらめく剣は戦いを連想させる。塔の窓の赤さは辺りの暗さと対照的に見えるが、これまで見てきたぎらぎらとした不気味な赤色であり、サムは恐怖感に苛まれていく。

サムは小道を進んでいく。今や塔はサムの真上にあつて、威圧するように黒々と聳え、赤い目のような塔の光が燃えている。突然足音が聞こえて来る。

Tramping feet and shouts behind. He wheeled round. He saw small red lights, torches, winking away below there as they issued from the tunnel. At last the hunt was up. The red eye of the tower had not been blind. He was caught. (343)

重い足音と罵りあう声が聞こえ、小さな赤い明かりが目に入る。それらは次々と連続して現れ、サムを探しはじめる。そして、サムは見つかってしまう。塔から照らし出す光は‘the red eye’として表現され、これは第三巻でのオークの盾の目の印と結びつく。

このように第四巻で見られる赤い光は、第三巻で示されていた太陽の光ではなく、オークがいる塔の光である。それは、第四巻前半から描かれているが、最後にやっと正体が分かり、第三章の〈赤い目〉の悪印象から通じている箇所が多い。フロドとサムは、暗闇の中で不気味な赤い光を目にしながら敵に近づいていく。つまり悪の中核へ向かっていくことを意

味しているのである。

（３）暗闇の世界の光

『二つの塔』では、暗闇の中で光を放つものが登場する。ここでは第三巻で登場する水晶のような透明の珠と第四巻で登場するガラス瓶について考察していく。

水晶のような透明の珠は、サルマンが逃げていくときにその上の方からグリマがガンダルフたち一行の方へ投げ落としたものである。珠はガンダルフが所持することになるが、ピピンがその珠に興味を示す。ピピンはしばらくその珠を覗いたときに見えた赤い奥底のことを忘れられず、夜中、誘惑に負けて黒い布に包まれたその珠を持ち出す。

At first the globe was dark, black as jet, with the moonlight gleaming on its surface.... Soon all the inside seemed on fire; the ball was spinning, or the lights within were revolving. Suddenly the lights went out. (197)

珠は真っ黒で、光は月の光が珠の表にあたって光っているだけであり、それ自体は光を発していない。そこには光は見えないのである。珠の‘black’は周りの暗闇と呼応し、さらにピピンの誘惑という悪の行為をも象徴している。ピピンは珠を覗きこんだことで悪い事態に引き込まれることなく寸前のところで助かり、自らの行為を反省したが、悪への誘惑に陥りかけた例である。

一方、フロドとサムは、ゴラムの道案内でミナス・モルグルの暗闇の中を進んでいく。さらに彼らは、これまでの中で最も暗く光のない洞穴に導かれる。あまりの暗さに何も見えなくなってしまうが、その時、サムはロスロリアンの女王ガラドリエルからもらったガラス瓶を持っていることに気づく。

He took his staff in one hand and the phial in his other. When he saw that the clear light was already welling through his fingers, he thrust it into his bosom and held it against his heart. Then turning from the city of Morgul, now no more than a grey

glimmer across a dark gulf he prepared to take the upward road. (317)

辺りは暗闇であるが、ガラス瓶は透明な光を放っている。光は指の間から溢れ出ており、強い光である様子と透明で混じりけのない美しい光であることを表わしている。サムはその光を感じ、ガラス瓶を心臓に押し当てること、強い勇気が備わる。小さなガラス瓶の光の強さは、かすかに灰色に光るモルグルの城壁の光の弱さと対照的である。

これまでの腐敗臭とは違う山積みとなった悪臭が洞穴に漂っている。道案内をしてきたゴラムがいつのまにか消え、フロドとサムは今後の進路の選択に迫られる。光が全く当たらない暗闇の中で悪臭も次第に強くなり、フロドとサムは気分を害し、恐怖感に苛まれる。暗闇の中を手探りしながら二人で手を取り進んでいると、背後から敵意にみちた音が聞こえて来る。しかし何の姿も見えない。二人には以前、塚山で襲われた時の記憶がよみがえってくる。サムはゴラムに罠にかけられたと察知する。そのとき、サムは一筋の光を見たような気がする。

Then, as he stood, darkness about him and a blackness of despair and anger in his heart, it seemed to him that he saw a light; a light in his mind, almost unbearably bright at first, as a sun-ray to the eyes of one long hidden in a windowless pit. Then the light became colour: green, gold, silver, white. (328-329)

この光はサムの心の中で感じ取った光であり、どんな光よりも眩しく美しく、緑色、金色、銀色、白色を帯びている。光は眩しいがその色は明るい色彩である赤色や黄色などではない。緑色、金色、銀色、白色はすべてエルフやエルフの国ロスロリアンを連想させる色彩である。緑色はロスロリアンの木々を、金色と銀色は高貴さを象徴する色として王ケレボルンや女王ガラドリエルの髪の毛の色であり、白色はケレボルンとガラドリエルの衣裳の色である。サムはこの光を感じたことで、ガラス瓶を取り出し、暗闇の中で明かりを照らし出すことができるのである。

ガラス瓶の光はフロドとサムにエルフの力が備わった強い希望の光となったのである。

フロドはガラス瓶を持ち出してかざしてみる。

For a moment it glimmered, faint as a rising star struggling in heavy earthward mists, and then as its power waxed, and hope grew in Frodo's mind, it began to burn, and kindled to a silver flame, The darkness receded from it, until it seemed to shine in the centre of a globe of airy crystal, and the hand that held it sparkled with white fire. (329)

最初はおぼろげな光であったが、やがて光の力が強くなっていく。同時にフロドの心にも力が満ちてくる。光は輝き、銀の焰となって暗闇の中に明るさをもたらす。さらに光のかざす手も白い光にきらめき、美しい輝きを放っているのである。ガラス瓶の光は、周りに明るさをもたらすだけでなく、フロドの心の中にも明るさをもたらすのである。

ガラドリエルの光とシェロブの闇、生と死の、育成と破壊の本質はフロドと戦うのである。彼はそれら両方―善悪両面の内的自己と向き合わなければならない⁵。

フロドは生と死の狭間で、ガラドリエルのガラス瓶の光を受け、闇の中の敵シェロブと戦う使命を実感する。それは、善と悪の戦いに立ち向かっていかなければならないことを意味している。

しかし、ガラス瓶の光はシェロブの個眼に反射されてしまう。それは、様々な悪の力が強く働いたからである。次第に辺りは暗闇となり、光は一筋も通さなくなる。そして、シェロブの蜘蛛の巣に引っ掛かる。一度は蜘蛛の巣を切り払い、脱出することができるが、サムがガラス瓶の光を隠すと腹部に青白い光と悪臭を放ちながらシェロブが近づいてくる。フロドはガラス瓶を手離して小道を駆け上がっていった。

もう、シェロブが追いかけていることを知らせようとしたサムは、ゴラムに捕まえられる。そして、フロドは地面に倒れ込んでしまう。絶体絶命となったサムはガラス瓶の存在に気づく。するとどこからかエルフの音楽が聞こえて来る。エルフの音楽を察知するのは、シェロブの洞穴に入り、暗闇の中で困惑していたときと同様である。エルフの音楽で力を得たサムは、ガラス瓶をシェロブに向ける。ガラス瓶は手の中に輝き、星のように燃え上がる。ガラス瓶の光は、シェロブの頭部にささり、シェロブを退治することができるのである。これは善と悪との戦いで善が勝利したことを意味していると言える。また、ここではシェロブの悪臭を感じた臭覚、エルフの音楽を聞いた聴覚、ガラス瓶の光とそれをかざす手の色を見た視覚が相乗効果をもたらしている。ガラス瓶の光は、恐怖感で満ち、フロドの力尽きた姿を目にしたサムに強い勇気と力を与え、敵、つまり悪を迎え撃つことができたのである。この点に関連して、ウッドはサムの状況を次のように分析する。

最後まで忠実なサムがフロドの運命に心悩ませないということは、彼らの任務の結果はどうであれ、存続する未来に対する希望を彼が見出したということである。さらに際立つのは善と悪、光と闇、生と死、希望と絶望の相対的な力についてのサムの認識である。…… 闇は光を離れてはいかなる意味も持ち得ないという深淵かつ逆説的な真理を彼は認識する⁶。

サムが未来への希望を見出すきっかけとなったのは、闇の中で輝いたガラス瓶の光である。「ヨハネによる福音書」1章5節「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」にもあるように、光が闇の攻撃に耐えるばかりではなく、闇を克服する力を有している⁷のである。光があるからこそ闇の中での輝きに力が存在し、闇があるからこそ光の力が明らかになるのである。サムはそれを理解することが

⁵ Patrick Grant, 'Tolkien: Archetype and Word', Rose A. Zimbardo and Neil D. Isaacs ed., *Understanding The Lord of the Rings: A Reader's Companion*. London: HarperCollins Publishers, 2005, p.172.

⁶ ラルフ C. ウッド『トールキンによる福音書』、竹野一雄訳、日本キリスト教団出版局、2006年、p.221.

⁷ マーク・エディ・スミス『「指輪物語」の真実』、斎藤兆史監訳、三谷裕子訳、角川書店、2003年、p.97.

できたのである。

結論

このように『二つの塔』では様々な場面で〈光〉の描写の色彩表現が見られる。それは単に〈光〉の様子を描いているのではなく、色彩表現による効果も狙っている。〈旅の仲間〉は離散し、三つのグループに分かれ、厳しく険しい状況の中、常に疲労感と恐怖感と戦いながらの旅が続く。各エピソードは、冒険物語として時の変化を基軸とし、周りの風景の様子や登場人物の心理状況などが詳細に描かれている。〈光〉の描写はそれらを直接的あるいは間接的に表わし、物語構成や物語展開と深く関連している。

第一に、物語展開に即した使用。特に物語展開上、重要な登場人物の登場前に色彩表現を伴う光の描写が見られる。彼らは旅人たちを助け、力となり、救いをもたらす。色彩表現を伴った光の描写は、それを伴わないときよりも様々な事柄を強調し、物語の分岐点や節目となっている。これらを踏まえ、読者はその場面が物語展開の重要な局面であることを予期できるのである。

第二に、色彩表現を伴うことによる登場人物の心理状況の詳細な描写。『二つの塔』では、登場人物は疲労困憊で険しい情景の中、厳しい旅を続けるが、時間の移り変わりや風景の変化に敏感に反応する。登場人物の心理状況は直接的表現からだけではなく、光を通して、時には間接的な面から周りの風景の様子からも読み取ることができる。例えば、太陽の光の色として様々な色彩が使用されているが、それらは細かな心理状況の違いを表現するためである。また、ガラドリエルの玻璃瓶の美しい光は、暗闇の中で輝くことで、フロドやサムに希望の光を与え、最終的に悪の象徴であるシェロブを倒すことができる。旅人たちは明るい太陽の光に癒され、善の選択や結果を導き出し、逆に暗闇の中では不安感と恐怖感に苛まれ、悪の選択や結果に通ずる。さらにフロドたちと相対する立場をとるゴラムの心理描写によって、善と悪の対比が明確化している。

第三に、作者トルキーンの繊細な観察力と巧みな表現力。場面に応じて〈光〉を表わす語は‘light’だけではなく、強さや状態によって使い分けられ、

様々な色彩表現が加わり、各場面の周りの風景や登場人物の様子の微妙な違いが詳細にかつ丁寧に表現されている。また、太陽を〈黄色の顔〉、月を〈白色の顔〉と色彩が持つ印象を活かした比喩表現も見られる。さらに、視覚だけでなく、臭覚や聴覚など五感の働きも重要視し、効果的に描写されている。これらは作家として、芸術家として作品の主題を巧みに表現することを試みたトルキーンの物語技法の一つであり、トルキーン作品の魅力と言えるのである。『二つの塔』は、構成的に見ると同じ時系列の中で展開されている二つの物語から成り、相反する物語展開をたどる。第三巻は、〈旅の仲間〉の離散、仲間の死から始まるが、前向きに旅を続け、〈旅の仲間〉との再会を果たし、最後は権力欲に惑わされて墮落したサルマンを追放する。夜から朝を迎える場面の描写なども多く、厳しい旅でありながらも、明るい方向へ向かっていく印象を受ける。一方、第四巻は、第三巻同様〈旅の仲間〉の離散後の物語となるが、第三巻に比べて暗い色が使用されている場面が多い。それは、この巻で表立って登場するゴラムの影響が大きい。フロドとサムは明るい情景を求めるのに対し、ゴラムは暗い情景を好み、明暗の対比が見られる。これは物語の主題である善と悪の闘争にも通低する。第三巻は暗から明に、第四巻は明から暗にという理想的経験の原型と非理想的原型の移行のパターンが見てとれる。つまり物語の中心的主題である善と悪との対立抗争を暗に表徴していると言える。それらを詳細に明確に表わす方法の一つとして、巧みな〈光〉の描写の色彩表現が用いられているのである。

(Received: December 31, 2009)

(Issued in internet Edition: February 8, 2010)